

幼児の仲間関係に関する研究

—— 仲間内地位と社会的行動特徴に関する仲間アセスメントの関係 ——

前 田 健 一

(幼児心理研究室)

(平成5年4月26日受理)

子どもの仲間関係に関する多くの研究は、仲間内地位と関連する認知的・行動的・情緒的特徴を明らかにしようと試みてきた (Coie, Dodge, & Kupersmidt, 1990; Gresham, 1988; Newcomb, Bukowski, & Pattee, 1993)。仲間内地位はソシオメトリック測度に基づいて識別・分類されるが、この分類システム自体も研究の発展と共に変化してきた (Newcomb, Bukowski, & Pattee, 1993)。1次元のソシオメトリック地位分類システムは子どもを人気児と非人気児に大別するが、非人気児をさらに拒否児と無視児に区別することができない。そのため、最近では2次元の分類システム (Coie, Dodge, & Coppotelli, 1982; Newcomb & Bukowski, 1983) を使用し、人気児、拒否児、無視児、両論児、平均児のように子どもの仲間内地位を細分化する研究が主流を占めている。例えば、Coie, Dodge, & Coppotelli (1982) は小学3年生、小学5年生、中学2年生の計848名を対象にソシオメトリック指名法を実施し、肯定的指名得点と否定的指名得点を組み合わせて各学年別に人気児、拒否児、無視児、両論児、平均児の5つの地位群を分類した。これと同時に、6項目の行動特徴について仲間アセスメントを実施し、5つの地位群がそれぞれどのような特徴をもつと仲間から見られているかについて比較した。その結果、人気児は「協調的である」と「リーダーシップ」の得点が高く、「けんかを始める」、「集団活動を破壊する」、「人に援助を求める」の得点が低かった。拒否児は人気児とまったく反対の傾向を示した。両論児は「リーダーシップ」の得点では人気児と同程度であったが、同時に拒否児と同様に「けんかを始める」、「集団活動を破壊する」の得点が高かった。また、両論児の「協調的である」の得点は人気児と拒否児の間であった。無視児は「恥ずかしがりやで一人活動をする」において5群中最も高い得点を示したが、他の行動特徴では平均児と差がなかった。

このように2次元分類システムを使用した研究では、拒否児と無視児の特徴像が異なることを報告している。しかし、仲間アセスメント情報から各地位群の特徴を明らかにした研究はほとんどが小学生以上の子どもを対象としており、幼児を対象とした研究はほんのわずかしか見られない (Milich, Landau, Kilby, & Whitten, 1982; Olson & Brodfeld, 1991; 前田・片岡, 1993)。これは、おそらく幼児では仲間の特徴を記述するのに多くの時間を要することや仲間の特徴について未分化な見方をする可能性 (Coie, Dodge, & Kupersmidt, 1990)、あるいは幼児の言語報告能力の限界などを考慮しているからであろう。これらの点を考慮して Milich, Landau, Kilby, & Whitten (1982) や Olson & Brodfeld (1991) は「けんかする」とか「部屋をよく走り回る」などの具体的行動項目を口頭で質問し、それぞれに該当する仲間を提示された仲間の写真の中から選ばせる写真仲間アセスメント法を使用した。しかし残念ながら、両

研究とも男児のみを対象としていること、肯定的指名と否定的指名を求めながら仲間内地位群を分類しないで各得点との相関係数しか報告していないこと、攻撃性や過動性の項目が中心で引っ込み思案や社会的コンピテンス（社交性）の項目を使用していないこと、などいくつかの限界がある。

前田・片岡（1993）は写真仲間アセスメント法を使用し、攻撃性、社会的コンピテンス、引っ込み思案を代表する9項目の質問を行い、5つの仲間内地位群間で仲間アセスメント情報の結果を比較している。その結果、攻撃性尺度得点では両論児と拒否児が平均児、人気児、無視児よりも高かった。社会的コンピテンス尺度得点では人気児が最も高く、拒否児が最も低かった。引っ込み思案尺度得点では拒否児が人気児よりも高い傾向にあったが、5群間に顕著な差異はみられなかった。前田・片岡（1993）の結果は小学生を対象とした従来の研究結果（例えば、Coie, Dodge, & Coppotelli, 1982）とほぼ一致するものであり、幼児でも仲間アセスメント情報が信頼できることを示した。しかし、攻撃性、社会的コンピテンス、引っ込み思案の各尺度得点は9項目の因子分析の結果から作成された3項目ずつの合成尺度得点であり、各項目別得点については報告していない。また、仲間内地位群は2次元分類システムによって分類され、1次元分類システムによる結果との比較を行っていない。さらに、ソシオメトリック測度も仲間アセスメント測度も1回しか収集していないので、どちらの測度が安定しているのか検討できなかつた。

本研究では同一幼児集団を対象にして写真仲間アセスメント法を実施し、各項目別得点と3つの尺度得点において、ソシオメトリック指名法測度に基づく2次元分類システムを適用した地位群間比較とソシオメトリック評定法測度に基づく1次元分類システムを適用した地位群間比較を行った。本研究の目的は、(1)写真ソシオメトリック測度と写真仲間アセスメント測度の安定性を比較検討すること、(2)幼児を対象にして仲間内地位群の行動特徴を再検討すること、(3)2つの地位分類システムに見られる結果の類似と差異を比較検討することである。

方 法

対象児 対象児は松山市内にある公立保育園の4歳児クラスの幼児23名と5歳児クラスの幼児27名の計50名であった。男女の内訳は表2に示すとおりである。彼らの平均年齢と年齢範囲は4歳児クラスが4歳9か月（4歳6か月～5歳1か月）、5歳児クラスが5歳8か月（5歳2か月～6歳1か月）であった。

実施時期 1回目の写真ソシオメトリックテストおよび写真仲間アセスメントは1992年5月29日～6月16日に、2回目の写真ソシオメトリックテストおよび写真仲間アセスメントは1992年7月14日～7月18日にかけて実施した。

材料 (1)個別写真カード：写真ソシオメトリック指名法と評定法および写真仲間アセスメントでは、各幼児のカラー写真カードを使用した。写真は各幼児が一人で壁を背に立っている姿を正面から撮影し、胸から上の部分を縦5.5cm×横4.5cmの大きさにプリントしたものであった。各幼児の写真を1枚ずつ縦7cm×横5cmの白色厚紙に貼りつけて、個別の写真カードを作成した。この他に、写真ソシオメトリック評定法では3つの分類箱を用意し、仲間の個別写真カードを分類させた。各箱は白色厚紙を用いて作成され、底面積が縦12cm×横12cm、3つの側面の高さが5cm、残り1側面の高さが12cmであった。各箱の高さ12cmの内側面には、それぞれ3色

の色画用紙に描かれたハッピーな顔（ピンク色）、ニュートラルな顔（黄色）、悲しそうな顔（青色）の表情略線画を貼り付けてあった。

(2)仲間アセスメント項目：Pekarik, Prinz, Liebert, Weintraub, & Neale (1976) の仲間評価項目や前田 (1991, 1992) を参考にして、表1に示す9項目を用意した。

表1 仲間アセスメント項目の質問内容

項目	質問内容
1.	みんなが積み木をしたり、絵本を読んだり、楽しく遊んでいます。そんなとき、ひとりぼっちでいる子がいます。その子は、〇〇組さんの中では誰かな？
2.	みんなが積み木をしたり、お外で楽しく遊んでいます。ところがその中に、すぐに怒ったり、けんかを始める子がいます。その子は、〇〇組さんの中では誰かな？
3.	みんなが砂場で遊んだり、自転車に乗って遊んでいます。その中で誰とでも仲良く遊べる子がいます。その子は、〇〇組さんの中では誰かな？
4.	みんながブロックで遊んだり、砂場で遊んでいます。ところが、お友達の邪魔ばかりしている子がいます。その子は、〇〇組さんの中では誰かな？
5.	お友達がけんかをして泣いています。そんなとき、親切に助けてあげている子がいます。その子は、〇〇組さんの中では誰かな？
6.	みんなが楽しくお話ししながら、おかあさんごっこや砂場遊びをしています。ところが、お友達とあまり話をしていない子もいます。その子は、〇〇組さんの中では誰かな？
7.	みんなが遊んでいるときに、(男児：「～するな」「～してこい」「～せーや」)、(女児：「～したらいかん」「～してや」「～してきてや」というふうに、よくお友達に命令している子がいます。その子は〇〇組さんの中では誰かな？
8.	みんなが鬼ごっこをして遊んでいます。ところが、一緒に遊んでいない子がいます。そのとき、誘ってあげても仲間に入らない子は、〇〇組さんの中では誰かな？
9.	お友達と一緒に遊びたいときに、「入れて」と言えたり、お友達の使っている自転車やおもちゃを貸して欲しいときに「貸して」と言える子がいます。その子は、〇〇組さんの中では誰かな？

手続き 写真ソシオメトリックテストと写真仲間アセスメントは、個別に次の順序で連続して実施した。(1)写真と名前の確認、(2)仲間アセスメント(1項目～3項目)、(3)写真ソシオメトリック指名法、(4)仲間アセスメント(4項目～9項目)、(5)写真ソシオメトリック評定法。この実施順に、以下具体的な手続きについて説明する。

(1)写真と名前の確認：厚紙で作成したバスを取り出し、それぞれの座席に各対象児と同一クラスの仲間全員の写真カードを順に差し込んで提示した。そして「みんながバスに乗ってやって来た」と話した。バスは調査に対する幼児の興味を喚起する目的で使用された。この後、仲間の写真カードを1枚ずつ順にバスから取り外し、その写真カードを対象児に見せながら、その写真の仲間名を尋ね、仲間の名前と写真を一致させ得るか否かを確認した。この結果、ほとんどの幼児が仲間全員の名前を言えた。

(2)仲間アセスメント(1項目～3項目)：次に、クラス全員の写真カードを床上にランダムに配列して提示した。その中から対象児自身の写真カードを取り出して対象児の左横に置き、残りの写真カード全部を指さしながら、次のように教示した。「ここに、△△組(対象児の組名)のお友達の写真がありますね。これから、△△組さんの中で、こんなことするお友達は誰かな？と〇〇ちゃんに聞いていきますから、分かったらその子の写真を指さして教えて下さいね。」この後、表1の仲間アセスメント項目1～3までの各質問をし、それぞれに該当すると思う仲間の写真を3名まで選ばせた。その際、対象児が指さした仲間の写真カードはその都度裏返して置き、残りの写真カードの中から2番目、3番目の仲間写真カードを選ばせていった。

(3)写真ソシオメトリック指名法：再度、対象児を除くクラス全員の写真カードを床上にランダム配列し、次の教示を与えて肯定的指名を3名まで選ばせた。「この中で、〇〇ちゃんが保育園で遊ぶとき、1番（2番目に、3番目に）一緒に遊びたい子は誰ですか。」肯定的指名が終了した後、同様の手順で次の質問をしながら、否定的指名を3名まで選ばせた。「今度は、この中から〇〇ちゃんが保育園で遊ぶとき、1番（2番目に、3番目に）一緒に遊びたくない子は誰ですか。」

(4)仲間アセスメント（4項目～9項目）：(2)と同様の手順で、表1の項目4～9までの各質問をし、それぞれに該当すると思う仲間の写真を3名まで選ばせた。

(5)写真ソシオメトリック評定法：まず床上に3つの分類箱を横一列に配置した。対象児から見て、右側にハッピーな顔の箱、左側に悲しそうな顔の箱、中央にニュートラルな顔の箱を置いた。ニュートラルな顔の箱を中央に置いた方が分類しやすいと考え、どの対象児にも箱の提示位置を一定にした。対象児を除く仲間全員の写真カードをランダムな順に束ねた後、次の教示を与えて写真カードを1枚ずつ対象児に手渡していった。「今度は△△組のお友達の写真を1枚ずつ〇〇ちゃんに渡します。〇〇ちゃんは、写真のお友達をよく見て、〇〇ちゃんが保育園で一緒に遊びたい子だなと思ったら、この箱（ハッピーな顔の箱）に入れて下さい。遊びたくない子だなと思ったら、この箱（悲しそうな顔の箱）に入れて下さい。遊びたいか遊びたくないかわからないなと思ったら、この箱（ニュートラルな顔の箱）に入れて下さい。それでは、この写真の子はどの箱に入れますか。」

得点化の方法 (1)ソシオメトリック指名法の得点：対象児ごとに仲間から受けた肯定的指名数と否定的指名数をそれぞれ集計した。その後1回目と2回目の肯定的指名数同士または否定的指名数同士を加算した。これらの加算した肯定的指名数と否定的指名数について、本人を除くクラスの仲間数で除算し、仲間一人当たりの指名数を算出した。その後、クラス全体の平均値とSDに基づいて標準得点に変換した。次に、この2つの標準得点（肯定的指名得点=L得点、否定的指名得点=D得点）から、社会的好み得点（ $SP=L-D$ ）と社会的影響力得点（ $SI=L+D$ ）を算出した。L得点は仲間から積極的に好かれる程度を、D得点は仲間から積極的に拒否される程度を表す。SP得点は好かれる程度と拒否される程度の差を表し、SI得点は好かれる程度または拒否される程度にかかわらず仲間への影響力が強いことを表す。

(2)ソシオメトリック評定法の得点：対象児ごとに、仲間からハッピーな顔の箱に分類された場合に評定値3を、ニュートラルな顔の箱に分類された場合に評定値2を、悲しそうな顔の箱に分類された場合に評定値1を配点し、評定値の合計得点を求めた。この後、1回目の合計得点と2回目の合計得点を加算し、それを評定した仲間数で除算し、平均評定値を算出した。この平均評定値は仲間からの受容度を表す一次的な指標と考えられている。

(3)仲間アセスメントの得点：各項目別に、(1)のL得点と同様の方法で得点化した。

地位群の分類方法 Coie & Dodge (1988) の分類方法に従った。1回目と2回目の合計得点から算出された写真ソシオメトリック指名法のL得点、D得点、SP得点、SI得点に基づいて、表2の分類基準を適用し各地位群を分類した。表2は、その結果分類された各地位群の人数内訳を示したものである。人気児は多くの仲間から好かれ、拒否されることの少ない幼児たちである。拒否児は人気児と反対の傾向を示し、多くの仲間から拒否されやすい幼児たちである。平均児は好かれる程度も拒否される程度も平均的な幼児たちである。無視児は好かれることも拒否されることも少ない幼児たちである。なお両論児は、ある仲間からは好かれるが

幼児の仲間内地位と仲間アセスメントの関係

表2 指名法に基づく各地位群の人数内訳と分類基準

地位群	分類基準	4歳児		5歳児		全体		
		男	女	男	女	男	女	計
人気児	$SP > 1, L > 0, D < 0$	2	1	2	6	4	7	11
拒否児	$SP < -1, L < 0, D > 0$	4	0	2	4	6	4	10
平均児	$-1 < SP < 1, -1 < SI < 1$	5	2	2	3	7	5	12
無視児	$SI < -1, L < 0, D < 0$	3	3	1	5	4	8	12
両論児	$SI > 1, L > 0, D > 0$	2	1	2	0	4	1	5
	計	16	7	9	18	25	25	50

表3 評定法に基づく各地位群の人数内訳と分類基準

地位群	分類基準	4歳児		5歳児		全体		
		男	女	男	女	男	女	計
高地位児	$Z > 0.5$	3	3	2	8	5	11	16
中地位児	$-0.5 < Z < 0.5$	9	3	5	6	14	9	23
低地位児	$Z < -0.5$	4	1	2	4	6	5	11
	計	16	7	9	18	25	25	50

Z: 平均評定値の標準得点

別の仲間からは拒否される幼児たちである。いわば、仲間の意見が賛否両論に分かれる幼児たちである。表3は、評定法の平均評定値について年齢クラス別に標準得点に変換し、表3の分類基準を適用して3つの地位群に分類した結果である。高地位児は仲間から受容される程度が高く、低地位児は低く、中地位児は両者の中間にあたる。

結 果

各得点の安定性係数

表4は、約1か月の期間において2回実施したソシオメトリック測度および仲間アセスメント測度に基づいて、同一得点同士の1回目と2回目間で Pearson 積率相関係数を算出した結果である。ソシオメトリック測度では指名法の得点よりも評定法の得点が高い安定性を示している。指名法の得点の中では、L得点の安定性がD得点やSI得点のそれよりも高い。仲間アセスメント測度をみると、項目5と項目8の安定性は低いが、その他の7項目では有意な正相関が得られ、中程度～高程度の安定性を示している。

表4 同一得点の1回目と2回目間の相関係数

ソシオメトリック測度	仲間アセスメント測度
(1)指名法の得点	(1)項目別の得点
L得点 .42**	項目1 .62**
D得点 .25+	項目2 .83**
SP得点 .36*	項目3 .39**
SI得点 .28+	項目4 .44**
(2)評定法の得点	項目5 .23
平均評定値 .60**	項目6 .40**
平均評定値	項目7 .60**
の標準得点 .52**	項目8 -.06
	項目9 .50**
	(2)尺度得点
	コンピテンス .58**
	攻撃性 .81**
	引っ込み思案 .53**

N=50 +: $p < .10$ *: $p < .05$ **: $p < .01$

また、因子分析の結果(表7)に基づく3つの尺度得点では、いずれも有意な正相関が得られ、比較的高い安定性を示している。

各仲間アセスメント項目得点の地位群間比較

以下の分析では、各得点別に地位群間の比較を行った。いずれの分析においても、群間の分散等質性が保証される場合には1要因の分散分析を適用し、分散が等しくない場合にはWelch法によるt検定を使用した。

(1)指名法に基づく5群間の比較:表5は仲間アセスメントの各項目得点について人気児、拒否児、平均児、無視児および両論児の5群別に標準得点の平均値とSDを示したものである。各項目別に、5群間の比較をした結果、項目1では拒否児>平均児≒両論児の傾向にあった(いずれも $p < .10$)。項目2では両論児>無視児($p < .05$)であった。項目3では群の主効果が $F(4, 45) = 8.80$, $p < .001$ で有意となった。そこでダンカン法による多重比較をしたところ、人気児≒両論児>無視児≒拒否児(人気児>無視児≒拒否児および両論児>拒否児は $p < .01$ で、その他は $p < .05$)であった。また平均児>拒否児($p < .01$)であった。項目4では拒否児≒平均児>無視児≒人気児(いずれも $p < .05$)および両論児>無視児の傾向($p < .10$)がみられた。項目5では群の主効果が $F(4, 45) = 2.39$, $p < .06$ で有意傾向を示した。念のため多重比較をしたところ、人気児>両論児≒拒否児(いずれも $p < .05$)であった。その他の項目では5群間に有意差はみられなかった。

表5 各仲間アセスメント項目得点の群別平均標準得点

項目	人気児 (N=11)	拒否児 (N=10)	平均児 (N=12)	無視児 (N=12)	両論児 (N=5)
1.	-0.23(1.06)	0.54(0.98)	-0.19(0.46)	0.15(1.27)	-0.49(0.44)
2.	-0.20(0.43)	0.17(1.44)	-0.27(0.53)	-0.16(0.71)	1.15(1.36)
3.	0.82(0.66)	-1.01(0.73)	0.23(0.83)	-0.39(0.79)	0.62(0.67)
4.	-0.59(0.36)	0.63(1.21)	0.32(1.06)	-0.44(0.60)	0.33(0.93)
5.	0.53(0.94)	-0.63(0.85)	0.18(0.96)	0.07(0.94)	-0.50(0.72)
6.	0.07(1.18)	-0.03(1.04)	0.19(0.73)	-0.06(1.06)	-0.42(0.69)
7.	0.04(0.74)	-0.05(1.28)	-0.02(0.86)	-0.37(0.62)	0.93(1.28)
8.	-0.55(0.75)	0.37(0.83)	0.14(1.05)	0.13(1.15)	-0.18(0.68)
9.	0.56(0.98)	-0.55(0.86)	-0.06(0.90)	0.03(1.02)	-0.05(0.80)

()内はSD

(2)評定法に基づく3群間の比較:表6は仲間アセスメントの各項目得点について高地位児、中地位児および低地位児の3群別に標準得点の平均値とSDを示したものである。各項目得点別に、3群間の比較をした結果、項目1では低地位児≒中地位児>高地位児(順に $p < .05$; $p < .10$)であった。項目2では低地位児≒中地位児>高地位児の傾向にあった(いずれも $p < .10$)。項目3では群の主効果が $F(2, 47) = 19.34$, $p < .001$ で有意となった。多重比較の結果、高地位児>中地位児>低地位児(中地位児>低地位児は $p < .05$ で、その他は $p < .01$)であった。項目4では低地位児≒中地位児>高地位児(順に $p < .02$; $p < .001$)であった。項目5では群の主効果が $F(2, 47) = 11.13$, $p < .001$ で有意となり、高地位児>中地位児≒低地位児(いずれも $p < .01$)であった。項目6では低地位児≒中地位児>高地位児(いずれも $p < .05$)であった。項目8では群の主効果が $F(2, 47) = 8.40$, $p < .001$ で有意とな

り、低地位児>中地位児>高地位児（低地位児>高地位児は $p < .01$ で、その他は $p < .05$ ）であった。項目9でも群の主効果が $F(2, 47) = 7.51$, $p < .01$ で有意となり、高地位児>中地位児 \approx 低地位児（高地位児>低地位児は $p < .01$ で、その他は $p < .05$ ）であった。いずれの群間差も有意でなかったのは項目7だけであった。

表6 各仲間アセスメント項目の群別平均標準得点

項目	高地位児 (N=16)	中地位児 (N=23)	低地位児 (N=11)
1.	-0.44(0.45)	-0.05(0.82)	0.74(1.42)
2.	-0.37(0.46)	0.04(0.97)	0.46(1.36)
3.	0.90(0.62)	-0.19(0.86)	-0.90(0.61)
4.	-0.67(0.37)	0.21(0.94)	0.54(1.22)
5.	0.78(0.94)	-0.21(0.81)	-0.69(0.65)
6.	-0.49(0.60)	0.10(0.98)	0.49(1.19)
7.	-0.13(0.79)	-0.02(0.96)	0.22(1.28)
8.	-0.61(0.68)	0.04(0.88)	0.81(1.02)
9.	0.64(1.07)	-0.12(0.80)	-0.69(0.66)

()内はSD

仲間アセスメント得点の因子分析

対象児50名全員の仲間アセスメント得点に基づいて、9項目に関する主因子分析を行った。

表7は直交バリマックス回転後の因子構造行列を示したものである。因子負荷量の絶対値が0.40以上の項目についてみると、第I因子は項目3, 5, 9の3項目から成っている。これら3項目はいずれも社交性や協調性に関連するので、第I因子を社会的コンピテンスと命名した。第II因子は項目2, 4, 7, 8の4項目から成っている。項目

表7 各仲間アセスメント項目の得点範囲と因子分析結果 (N=50)

項目	得点範囲	因子			h ²
		I	II	III	
1.	-1.03~3.92	-.30	-.06	.82	.76
2.	-1.07~4.10	-.09	.87	-.15	.78
3.	-1.74~1.86	.72	-.11	-.22	.58
4.	-1.42~2.79	-.32	.62	.09	.49
5.	-2.19~2.82	.77	-.31	-.21	.74
6.	-1.49~3.46	-.15	.00	.81	.67
7.	-1.40~3.56	.07	.86	-.18	.78
8.	-1.64~3.83	-.15	.47	.20	.29
9.	-1.45~3.75	.75	-.02	-.12	.58
平方和		1.92	2.21	1.54	5.67
寄与率		.21	.25	.17	.63

8は一人遊びの傾向や仲間遊びに参加しない傾向を調べる目的で使用し、第III因子の引っ込み思案を構成するのではないかと予想した。しかし、分析の結果では第III因子よりも第II因子への負荷量が大きかった。表1の質問項目8から考えると、幼児たちは一人遊びの傾向よりも仲間からの誘いを拒否する傾向を尋ねられていると理解したのではないかと推測される。そこで、項目8も第II因子に含め、第II因子を攻撃性と命名した。項目1と6から成る第III因子は引っ込み思案傾向や対人的消極性に関連しているので、第III因子を引っ込み思案と命名した。社会的コンピテンス3項目、攻撃性4項目、引っ込み思案2項目の標準得点に基づいて、それぞれの平均値を算出し、各尺度得点とした。

各仲間アセスメント尺度得点の地位群間比較

(1)指名法に基づく5群間の比較：表8は仲間アセスメントの各尺度得点について人気児、拒否児、平均児、無視児および両論児の5群別に標準得点の平均値とSDを示したものである。各尺度得点別に5群間の比較をしたところ、社会的コンピテンスでは群の主効果が $F(4, 45) = 3.80$, $p < .01$ で有意であった。多重比較の結果、人気児>拒否児 ($p < .01$)であった。攻

表8 各仲間アセスメント尺度得点の群別平均値

尺度得点	人気児 (N=11)	拒否児 (N=10)	平均児 (N=12)	無視児 (N=12)	両論児 (N=5)
コンピテンス	0.64 (0.75)	-0.73 (0.53)	0.03 (0.90)	-0.10 (0.85)	0.03 (0.65)
攻撃性	-0.33 (0.38)	0.28 (1.01)	0.04 (0.71)	-0.21 (0.61)	0.56 (0.95)
引っ込み思案	-0.08 (1.10)	0.26 (0.91)	0.00 (0.51)	0.04 (1.11)	-0.45 (0.56)

()内はSD

撃性では両論児>無視児の傾向 ($p < .10$) にあった。引っ込み思案では群の主効果は有意でなかった。

(2)評定法に基づく3群間の比較:表9は仲間アセスメントの各尺度得点について高地位児, 中地位児および低地位児の3群別に標準得点の平均値とSDを示したものである。各尺度得点別に3群間の比較をしたところ, 社会的コンピテンスでは群の主効果が $F(2, 47) = 17.95$, $p < .001$ で有意となり, 高地位児>中地位児>低地位児

表9 各仲間アセスメント尺度得点の群別平均値

尺度得点	高地位児 (N=16)	中地位児 (N=23)	低地位児 (N=11)
コンピテンス	0.77(0.75)	-0.22(0.67)	-0.76(0.51)
攻撃性	-0.45(0.39)	0.07(0.75)	0.51(0.92)
引っ込み思案	-0.46(0.42)	0.03(0.83)	0.62(1.23)

()内はSD

(中地位児>低地位児は $p < .05$ で, その他は $p < .01$)であった。攻撃性では低地位児≒中地位児>高地位児(順に $p < .01$; $p < .05$)であった。引っ込み思案では低地位児≒中地位児>高地位児(いずれも $p < .05$)であった。

相関係数

(1)地位得点と仲間アセスメント項目得点との相関係数:表10の上段は地位得点の指標としてソシオメトリック指名法のL得点とD得点および評定法の平均評定値を使用し, これらの得点および月齢と仲間アセスメント項目得点との積率相関係数をまとめたものである。表10から, 月齢はいずれのアセスメント項目得点とも有意な相関を示していない。社会的コンピテンス因子を構成した3, 5, 9の項目得点はいずれもL得点や平均評定値と有意な正相関を示し, D得点と有意な負相関を示した。それに対して攻撃性因子を構成した4と8の項目得点はL得点や平均評定値と負相関を, D得点と正相関を示す傾向にあった。しかし, 項目2と項目7ではこの関係が明確でなかった。引っ込み思案因子を構成した項目1と6についてみると, 1の項目得点はL得点や平均評定値と有意な負相関を示すが, 項目6ではこの関係が明確でなかった。

(2)地位得点と仲間アセスメント尺度得点との相関係数:表10の下段は月齢および3つの地位得点と仲間アセスメント尺度得点との相関係数をまとめたものである。表10から, やはり月齢はいずれの尺度得点とも有意な相関を示していない。社会的コンピテンスはL得点や平均評定値と有意な正相関を示すと同時に, D得点とも有意な負相関を示した。それに対して, 攻撃性

はD得点と有意な正相関を示し、平均評定値と有意な負相関を示したが、L得点とは明確な相関を示さなかった。引っ込み思案はL得点および平均評定値と有意な負相関を示したが、D得点とは明確な相関を示さなかった。

(3)その他の相関係数：対象児50名全員のデータに基づいて3つの仲間アセスメント尺度得点同士の相関係数を

求めたところ、社会的コンピテンスと攻撃性間は $r = -.30$ ($p < .05$)、社会的コンピテンスと引っ込み思案間は $r = -.41$ ($p < .01$)、攻撃性と引っ込み思案間は $r = -.01$ (ns)であった。また、指名法のL得点とD得点間は $r = -.28$ ($p < .05$)、L得点と平均評定値間は $r = .59$ ($p < .01$)、D得点と平均評定値間は $r = -.42$ ($p < .01$)であった。

指名法の5地位群と評定法の3地位群における人数内訳

表11は、評定法の分類基準（表3）に基づく3地位群のそれぞれが指名法の分類基準（表2）ではどの地位群に分類されるかを示したものである。表11から、高地位児群16名中10名（63%）は人気児であり、残りの6名は4つの群に分散している。それに対して、低地位児群11名中、拒否児と無視児がそれぞれ5名（45%）ずつを占

めており、低地位児は拒否児と無視児から構成されることが分かる。中地位児群23名中、平均児が9名（39%）と最も多いが、拒否児、無視児、両論児もほぼ同数占めており、広範囲に分散している。しかし、人気児は1名と最も少ない。これらの結果から、1次元分類システムによる地位分類の結果は人気の高レベルでは2次元分類システムの結果と比較的一致するが、人気度の中および低レベルでは必ずしも2次元分類システムの結果と一致しないといえる。

考 察

まず本研究で使用した各得点の安定性について考察する。表4から、ソシオメトリック測度

表10 地位得点と仲間アセスメントの項目得点および尺度得点との相関係数

	月齢	L得点	D得点	平均評定値
(1)項目得点				
項目1	-.04	-.44**	.20	-.39**
項目2	.07	.04	.27+	-.28+
項目3	.13	.65**	-.32*	.57**
項目4	.04	-.29*	.49**	-.49**
項目5	.10	.36*	-.43**	.52**
項目6	-.08	-.19	.01	-.28+
項目7	.10	.14	.13	-.15
項目8	.01	-.35*	.17	-.47**
項目9	.00	.34*	-.33*	.44**
(2)尺度得点				
コンピテンス	.10	.51**	-.41**	.59**
攻撃性	.07	-.15	.34*	-.44**
引っ込み思案	-.06	-.34*	.11	-.37**

N=50 +: p<.10 *: p<.05 **: p<.01

表11 指名法と評定法による各地位群の人数内訳

指名法に基づく地位群	評定法に基づく地位群			計
	高地位児	中地位児	低地位児	
人気児	10	1	0	11
拒否児	1	4	5	10
平均児	2	9	1	12
無視児	2	5	5	12
両論児	1	4	0	5
計	16	23	11	50

の安定性では平均評定値 ($r = .60$) が最も高く、L 得点 ($r = .42$)、D 得点 ($r = .25$) の順に低くなっていた。この結果は従来の研究結果と一致している。Asher, Singleton, Tinsley, & Hymel (1979) は 4 歳児 19 名を対象に 4 週間の期間をおいて検討したところ、平均評定値 ($r = .81$)、肯定的指名数 ($r = .56$)、否定的指名数 ($r = .42$) を報告している。同様に、Olson & Lifgren (1988) は平均 4 歳 8 か月の幼児 34 名を対象に 3 週間の期間をおいて調べ、平均評定値 ($r = .81$)、L 得点 ($r = .52$)、D 得点 ($r = .48$) を見いだしている。いずれの研究も相関パターンは一致しているが、本研究の相関値は、これら 2 つの研究結果よりもいくぶん低い値を示している。これは、おそらく実施の時期が関係しているのかもしれない。前田 (1989) はクラス編成から約 3 か月後の 7 月に平均 1.29 日の期間をおいて安定性を調べたところ、4 歳児 ($N = 32$) の L 得点 ($r = .49$) と D 得点 ($r = .63$) の結果を得ている。ところが、同一幼児集団を対象に 11 月に 1 回目を実施し、翌年の 11 月に 2 回目を実施したところ、L 得点 ($r = .70$) と D 得点 ($r = .61$) となり、L 得点の安定性はむしろ 1 年間の期間をおいた方が高いという結果であった。この結果から、ソシオメトリック測度の安定性は期間の長短よりも仲間関係の安定した時期に測定するか否かに影響されやすいと示唆される。本研究の実施時期も 7 月であったので、ソシオメトリック測度の安定性がいくぶん低くなったものと考えられる。本研究では 2 回のソシオメトリック得点を合計した得点に基づいて地位群を分類した。これは、ソシオメトリック測度の安定性の低さを考慮したからであった。

ソシオメトリック測度に比べると、同時期に実施した仲間アセスメント測度の安定性は比較的高かった。この結果から、少なくとも幼児期では仲間アセスメント測度がソシオメトリック測度よりも子どもの仲間関係や社会的適応状態を知る情報として優れているといえる。なぜ仲間アセスメント測度の安定性はソシオメトリック測度の安定性よりも高かったのであろうか。表 1 から分かるように、仲間アセスメント項目は「一緒に遊びたい、遊びたくない」のソシオメトリックテストよりも具体的に客観的な行動側面について質問していたからであろう。特に、いくつかの項目得点を合成した尺度得点では単独の項目得点よりも比較的安定していることに注目しなければならない。例えば、社会的コンピテンス尺度得点の安定性 ($r = .58$) は、これを構成する項目 3 ($r = .39$)、項目 5 ($r = .23$)、項目 9 ($r = .50$) のいずれの安定性よりも高い値を示している。単独項目では 1 回目に指名された幼児が 2 回目に指名されない可能性は大きい。それに比べると、同一因子に基づく尺度得点では、たとえ 1 つの項目で 2 回目に指名されなくても別の項目で指名される可能性もあり、結果として尺度得点全体の安定性は維持されるのであろう。この点は項目別得点とは違った尺度得点の利点といえるかもしれない。

次に、仲間アセスメント結果に基づいて各地位群の特徴をまとめ、若干の考察を加える。表 8 から、5 つの地位群の中で人気児は社会的コンピテンスに最も優れ、攻撃性が最も少ないと見られていた。この結果は前田・片岡 (1993) の結果と一致する。さらに表 5 の項目別得点を見ても、地位群間に有意差が見られた項目 1～5 の中で社会的コンピテンスを構成する項目 3 と項目 5 では人気児が第 1 位の高い得点を示し、引っ込み思案の項目 1 や攻撃性の項目 2 と項目 4 では第 4 位または第 5 位の低い得点を示している。人気児は向社会的行動や協調性に優れ、仲間と肯定的な相互作用をし、すぐに怒ったり (項目 2) 友達の邪魔をする (項目 4) ことも少ないので、仲間とトラブルを引き起こしたり、けんかをする必要がないのであろう。仲間から好かれ受容され、よい仲間関係を維持しているようである。それに対して、拒否児は社会的コンピテンスが最も低く、攻撃性は第 2 位に多いと見られていた (表 8)。表 5 の項目 1～5

の得点でも、人気児とはまったく反対の評価を受けている。この結果も前田・片岡（1993）の拒否児の特徴を追証するものである。これらの結果から、拒否児は攻撃的・否定的な仲間相互作用をする傾向にあり、仲間活動を邪魔する存在として仲間から敬遠されていると考えられる。無視児は拒否児に次いで社会的コンピテンスが低いと見られているが、同時に人気児に次いで攻撃性も低いと見られている（表8）。これらの結果から、無視児は仲間の遊びや活動を妨害することも少ないけれども、積極的に仲間に加わり遊びをリードすることも少なく、仲間との相互作用に消極的であると見られているようである。両論児は拒否児以上に攻撃的であると見られているが、同時に「誰とでも仲良く遊べる子」（表5の項目3）としても人気児に次いで高く評価されている。最も引っ込み思案でないと見られている（表8）ことから分かるように、仲間の中で最も目立つ存在のようである。本研究の項目3「誰とでも仲良く遊べる子」を協調性よりもリーダーシップの意味で理解すれば、本研究の両論児の特徴はCoie, Dodge, & Coppotelli（1982）の両論児の特徴とよく似ていることが分かる。彼らの研究によると、小学3年生～中学2年生の両論児は拒否児と同様に攻撃的・破壊的であるが、同時に「リーダーシップ」が高いことで補う側面をもつと報告されている。社会的コンピテンスと攻撃性のどちらが顕著になるかによって、人気児または拒否児へと変化する可能性が高いと考えられる。両論児として分類される人数は従来いずれの研究でも少ないし、縦断的に両論児の地位変化を追跡した研究も見られない。この問題の検討は今後の研究に期待しなければならない。本研究ではソシオメトリック測度の安定性が低かったけれども、2回の測定結果を加算して各地位群の行動特徴を検討した結果、幼児や児童を対象とした以前の仲間アセスメント研究結果（Coie, Dodge, & Coppotelli, 1982; Coie, Dodge, & Kupersmidt, 1990; 前田・片岡, 1993; Newcomb, Bukowski, & Pattee, 1993）と同様に、仲間受容の低い拒否児と無視児が社会的行動特徴において明確に異なることを示した。積極的な介入指導を必要とするのは、無視児よりも拒否児であると示唆される。

最後に、指名法の得点に基づく2次元分類システムと平均評定値に基づく1次元分類システム間に見られる仲間アセスメント結果の類似点と相違点についてまとめ、若干の考察をする。3つの尺度得点の平均値（表9）をみると、中地位児を中間として両端の高位児と低位児間には有意差が見られる。また、表6では項目7以外のすべての項目において3つの地位群間に有意差が認められた。これらの結果は、仲間から受容されている幼児とそうでない幼児とでは社会的行動特徴にも相違がある可能性を示唆する点で、2次元分類システムの結果（表5と表8）と共通している。しかし、表9の1次元分類システムの結果から最も予測し難いことは、攻撃性尺度得点における拒否児と無視児間の相違点および人気児と両論児の相違点である。1次元分類システムを適用すると前者の2群は低位児の大多数を占めることになり、後者の2群は少なくとも低位児として分類されないという共通点をもっている（表11）。しかし、前者の2群は攻撃性尺度得点の平均値では第2位と第4位であり、後者の2群は第5位と第1位であり、それぞれの2群は相互に大きく異なる。平均評定値は安定性も高く、仲間全員の評定結果に基づくので数人の仲間評定が多少変動しても、その影響を受けにくい。この特徴は指名法の得点よりも優れているので、子どもの仲間内地位をまず概略的に把握するには適していると考えられる。その後で、不足する具体的情報を仲間アセスメントや行動観察で補えば、仲間関係に問題を抱える子どもを識別したり介入援助の対象児を選出する方法として有効利用されるであろう。特に、否定的指名を実施できにくい場合には有用な代替策となる。

引用文献

- Asher, S. R., Singleton, L. C., Tinsley, B. R., & Hymel, S. 1979 A reliable sociometric measure for preschool children. *Developmental Psychology*, 15, 443-444.
- Coie, J. D., & Dodge, K. A. 1988 Multiple sources of data on social behavior and social status in the school: A cross-age comparison. *Child Development*, 59, 815-829.
- Coie, J. D., Dodge, K. A., & Coppotelli, H. 1982 Dimensions and types of social status: A cross-age perspective. *Developmental Psychology*, 18, 557-570.
- Coie, J. D., Dodge, K. A., & Kupersmidt, J. B. 1990 Peer group behavior and social status. In S. R. Asher & J. D. Coie (Eds.), *Peer rejection in childhood*. pp. 17-59. New York: Cambridge University Press.
- Gresham, F. M. 1988 Social skills: Conceptual and applied aspects of assessment, training and social validation. In J. C. Witt, S. N. Elliott, & F. M. Gresham (Eds.), *Handbook of behavior therapy in education*. pp. 523-546. New York: Plenum Press.
- 前田健一 1989 幼児の仲間関係に関する研究—ソシオメトリック選択の性別偏好と安定性の検討—愛媛大学教育実践研究指導センター紀要 第7号, 63-78.
- 前田健一 1991 幼児の仲間関係に関する研究—仲間内地位と教育実習生による幼児の対人行動評価との関係—愛媛大学教育実践研究指導センター紀要 第9号, 83-104.
- 前田健一 1992 幼児の仲間関係に関する研究—幼児と小学3年生の仲間内地位に関する縦断的検討—愛媛大学教育学部紀要 第1部教育科学 第38巻第2号, 99-120.
- 前田健一・片岡美菜子 1993 幼児の社会的地位と社会的行動特徴に関する仲間・実習生・教師アセスメント教育心理学研究, 41, 152-160.
- Milich, R., Landau, S., Kilby, G., & Whitten, P. 1982 Preschool peer perceptions of the behavior of hyperactive and aggressive children. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 10, 497-510.
- Newcomb, A. F., & Bukowski, W. M. 1983 Social impact and social preference as determinants of children's peer group status. *Developmental Psychology*, 19, 856-867.
- Newcomb, A. F., Bukowski, W. M., & Pattee, L. 1993 Children's peer relations: A meta-analytic review of popular, rejected, neglected, controversial, and average sociometric status. *Psychological Bulletin*, 113, 99-128.
- Olson, S. L., & Brodfeld, P. L. 1991 Assessment of peer rejection and externalizing behavior problems in preschool boys: A short-term longitudinal study. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 19, 493-503.
- Olson, S. L., & Lifgren, K. 1988 Concurrent and longitudinal correlates of preschool peer sociometrics: Comparing rating scale and nomination measures. *Journal of Applied Developmental Psychology*, 9, 409-420.
- Pekarik, E. G., Prinz, R. J., Liebert, D. E., Weintraub, S., & Neale, J. M. 1976 The pupil evaluation inventory: A sociometric technique for assessing children's social behavior. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 4, 83-97.

付記 本研究の実施にあたり快くご協力下さいました味生保育園の先生方並びに園児の皆さんに心からお礼申し上げます。また、資料収集にあたっては石川奈緒美さん、泉あかねさん、高橋珠紀さん、谷口礼子さん、日野亜紀さん、松永佳代さん、森山人美さんから多大な援助を受けました。ここに記して感謝の意を表します。